

金融論とファイナンス
板垣有記輔先生ご退職にあたって
Monetary Theory and Finance Theory
Commemorative Issue in Honor of Professor Yukio ITAGAKI

小 林 孝 次
Koji KOBAYASHI

板垣有記輔先生は、40数年にわたって奉職された創価大学を2014年9月退職された。はじめに、板垣先生が教育・研究に力を注がれてきた金融論とファイナンス論について少し整理しておきたい。

金融論とひとくちにいてもその範囲はあまりにも広い。「貨幣とは何か」といった哲学的側面も含めた貨幣論から、現実の金融市場、またそこで扱われる金融商品、さらにはそれらの担い手となる金融機関を含む金融の制度的側面、そして金利に関する議論。また金融市場システムの頂点に位置する中央銀行論かつ金融政策論、インフレ・デフレの議論、さらには為替レートに関する議論をはじめとし、国際金融に関する内容等々金融論がカバーする範囲はきわめて広い。

ファイナンス論としても、マルコヴィッツの最適ポートフォリオ、トービンの分離定理、シャープのCAPMなどの最適資産選択理論や資金調達に関するコーポレートファイナンス論、そしてデリバティブ商品の議論へと展開する金融工学まで含まれる。ファイナンスは資金を賄うという意味から、企業部門だけではなく、政府部門も対象として含めて考えれば、金融と財政との関係も問題となってくる学問である。

あげれば本当に幅広い研究分野を含む学問領域である。海外はもちろんのこと、国内でも東京大学をはじめ中央大学や武蔵大学において金融学科が存在している。

近年、とりわけ80年代以降は、社会においても個人においてもコンピュータの導入が進展し、さらに21世紀に入ると、たかだかまだ15年しか経てないにもかかわらずインターネットが広く普及し、ネットなしには存在できない社会になりつつある。経済学はもともと数字や計算からは切っても切り離せない学問である。とりわけ金融の世界は、数学、統計学、そしていまや情報との結びつきがいつそう強まることにより、コンピュータ化された現代社会において伝統的な金融論からモダンファイナンスへと大きく進化してきた。実務においても、金融の世界は電子化が進み、かつては経済学部生の主な就職先とされていた銀行や証券の分野だが、現在では工学分野から多くの人材が進出している。それは、最近よく耳にするフィンテック（Financial

Technology)という言葉に象徴されているとおりである。

さて、こうした金融分野だが、そもそも金融論とファイナンス論は何が違うのだろうか。単純には「ファイナンス」という言葉は「金融」と邦訳されてきたものである。ここで、いくつか見解を引用しておきたい。

大村敬一は、金融論とファイナンス論の違いについて、資金の流れが銀行から市場経由へ変化したことによる新しい仕組みと考え方を学ぶものが、金融論からファイナンス論への変貌であると位置づけている。大村は「ファイナンス論」について『新鐘 No.65 早稲田に聞け！シリーズ1 経済』<http://www.waseda.jp/student/shinsho/html/65/6531.html>において以下のように述べている。「伝統的な金融論は、銀行を中心に金融メカニズムを議論しようとするものであった。……しかし、銀行に偏った我が国の金融システムはいま大きく変わりつつある。大企業を中心に、株式や社債などの証券を自ら発行して、市場から直接的に資金を調達するなど銀行離れが急速に広がっている。……ファイナンス論は、このような従来の金融理論の不十分な部分を補完・拡充する形で登場した。」

また、久保田敬一は『よくわかるファイナンス』（2001年、東洋経済新報社）において、リスクを考慮した資本市場を媒介とする総合的な分析として、ファイナンスについて以下のように述べている。「リスクを考慮して、貯蓄、投資活動について個人の意思決定ならびに企業の資金調達意思決定を、資本市場を媒介して総合的に分析を行い、そこから個人と企業への行動指針を提示するのがファイナンスという研究分野である。」

さらに、森平爽一郎は『物語（エピソード）で読み解くファイナンス入門』（2007年、日本経済新聞社）のなかで、不確実性や非合理性の側面から次のように述べている。「価格理論と呼ばれる伝統的なミクロ経済学は、消費の価格や労働の賃金がどのようにして決定されるかを議論するのに対して、ポートフォリオ理論では資金を投資した場合に、それから生み出される収益が将来にわたって不確実であるような資産、つまり資本資産の価格決定理論を築こうとしてきた。

これらは投資家の合理性の仮定のうえに理論を組み立てるが、非合理性という心理学的側面からアプローチする『行動ファイナンスの理論』も生まれている。」

さて、ここからは板垣有記輔先生との関わりを通して記させていただきたい。創価大学において、献身的に創大生の育成に当たってくださった板垣先生は、本学開学3年目の1973年に経済学部講師として赴任された。以来40数年にわたって、先生は研究者として、教育者として、創大建設に、そして私たち後進の育成に全力を注いでくださった。

板垣先生のご経歴を簡単に紹介させていただくと、先生は東北大学大学院経済学研究科・博士課程で、芳賀半次郎教授の下で理論経済学を専攻され、また1977-78年には、ロンドン大学 London School of Economics & Political Science (LSE) 大学院において、森嶋通夫教授の下で研究をされ、その後の一連の研究を主著『動的最適化と経済理論』として纏められて、東北大学より経済学博士号を取得されている。

たくさんの研究業績（主な業績は以下のアドレスを参照 <http://libir.soka.ac.jp/dspace/items-by-author?author=Itagaki%2C+Yukio>）が示しているように、先生は大変熱く研究活動を展開してこられた。これは板垣先生の学問の恩師であられた芳賀半次郎先生から伺ったことであるが、板垣先生と一緒にまた学びたいとの思いで、芳賀先生自身、東北大を退官後、創価大学に赴任されたとのことである。

教育活動におかれては、創価大学に着任されたころの早々のゼミにおいて、すでに森嶋氏のテキストを読破するゼミを展開されていたと、当時のゼミ生から伺ったことがある。また、二階堂副包『現代経済学の数学的方法 - 位相数学による分析入門』（岩波書店、1960年）などを大学院生対象に自主的に講義されていたようである。学部や大学院での授業の担当科目としては理論経済学、経済数学をはじめとし、金融論や数理ファイナンス理論をご担当していただいた。

先生の講義スタイルは、黒板の端から端まで書きまくるという、まさにお名前の通り、「黒板に書く、イタにカク」スタイルを通されていた。創価大学発展の理想を常に掲げ、講義レベルを決して落とすことなく、難解な命題をいつもわかりやすく、そして明るく楽しくご教授してくださった。

また経済学部においては長年にわたり学部長補佐を務められ、その後図書館長の任にも就いていただいた。趣味としては、山深い田舎の清流の川辺や里山を散策されるとともに、音楽鑑賞を楽しまれていらっしゃるようである。先生からはモーツアルトやベートーベンのピアノソナタを聴きながら数学に没頭できるときが最良の時間であると伺っている。

私個人においても、創価大学の研究所助手時代に大変お世話になり、研究所での研究会や理論経済学会の折にはさまざま激励をしていただいた。当時麻布にあった統計数理研究所で開催された時系列研究の一連のセミナーと一緒に参加した日の夜、大学で引き続き研究会があった。セミナー帰りの夕刻、創価大学行きバス停でパンをかじりながらバスを待っていた光景は今も鮮明に覚えている。先にも記したが学部長補佐を長年にわたりご担当され、私を含め、現在経済学部のスタッフになっている多くが板垣先生に育てていただいたメンバーである。

60歳を過ぎてからは、残念なことに先生は次々と病に罹り、お姿を見かける機会は少なくなりましたが、いままたお元気になられ、うれしいかぎりである。最後に、今後は奥様とともにモーツアルト等の音楽鑑賞や散策を楽しまれるなど、緩やかに最良の時間をお過ごしいただけるようお願い、板垣先生への感謝と御礼とさせていただきます。本当にお世話になりました。ありがとうございました。